みとものかず　猿橋部分抜粋

①

明治十三年六月十八日　上野原発

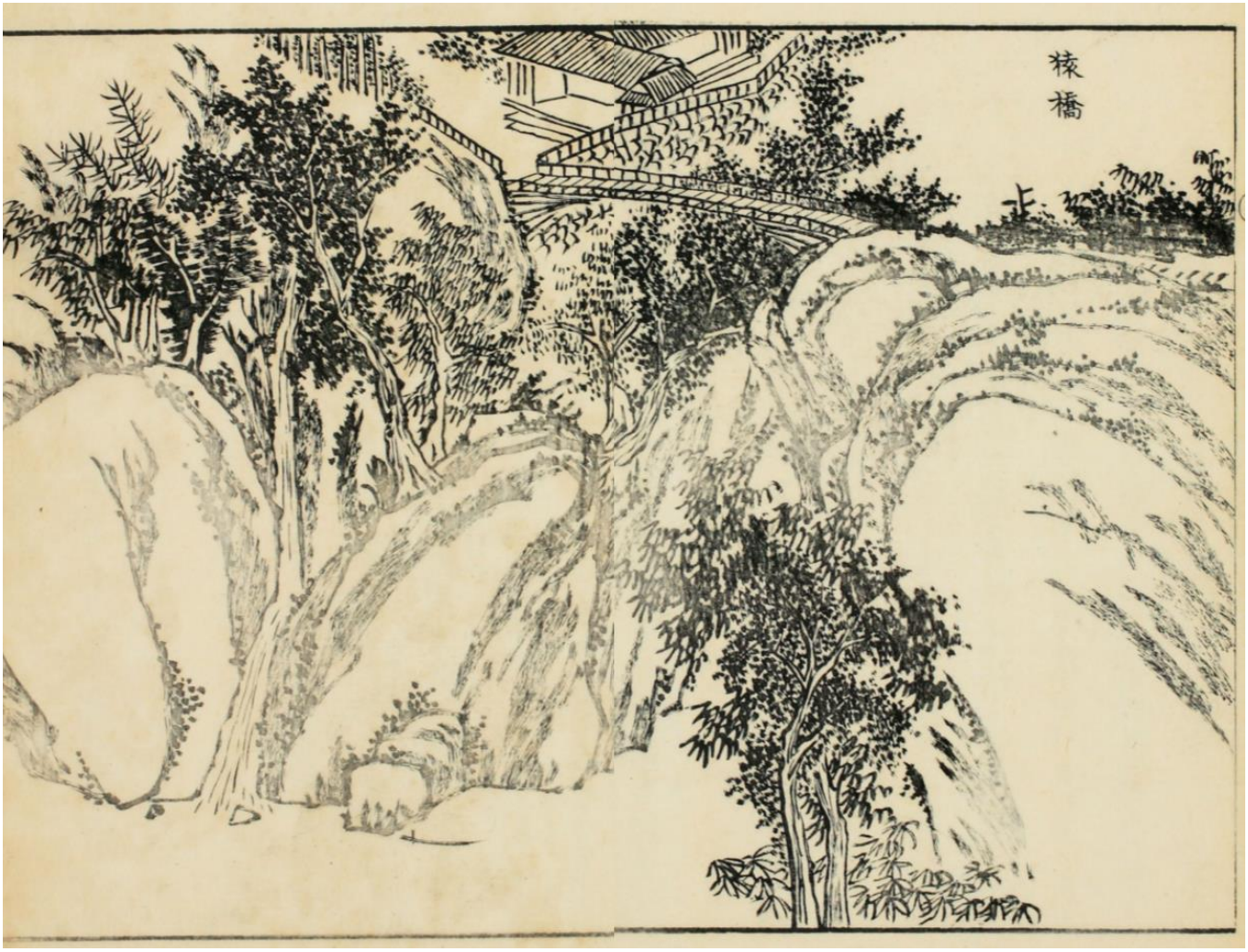
（中略）

九時三十分鳥沢の駅につく

行在所（あんざいしょ）は井上清武が家なり。おのれ（己）らがひる（昼）のいこひ（憩）所は白須太左衛門といへ（云）り。まだ早けれど昼餉食立出上輿召ひるげたうべてたちいでぬ。うへは御板こしにめさせ給へり。今日路大方険多たまへり。けふのみちおほかたけはしき山坂おほけれ（頃）ばなり。午前十一時のころ、猿橋駅につかせ（着）給へり。この駅より廿八町余りにして、猿はしにいたる（到）。長十七間、幅二間の板橋なり。桂川の川岸あひむか（相向）ひて削りたてたる如き巌の上にわたせ（渡）り。橋の

②

上より水際まで十二三間、水際より水底まで、また十二三間ありといへり。まことに其渕の水、青みわたりて藍のごとく（如）。橋のうへより見おろ（下）せば、めくるめきて危ふげなることいふ（云）ばかりなし。さて橋のつめに立（詰）つ（たち）、つくぐ見渡みわたせば、向ひの岸のなかばより半生（はえ）出（いで）たる木とも、あまそゝりそゝりたち（立）て、いとくらう（暗）しげり（茂）たる中より、一筋の滝つ瀬、ひゞき（響）もさやに



とゞろきおつるが、これも五六丈もやあらん。いはほをつたひてほとばしるに、其もとにすなとりする舟ひとつ横たはれる。筆にも詞にもおよぶべきにあらねど

さる橋の　岸より落る　滝つせに　夏猶寒き　こゝちのみして　うちわたりて岸よりすこしおりて、橋のうらを見る所あり。こゝより仰ぎみるに、橋柱たつべきところならねば、両岸より巨きなる材を、雁の並びゆくらんやうに、つぎ〳〵にさし出して、橋のけたをうけて、其うへに板をふせたり。そのたくみなること、めをおどろかせり。そも〳〵わが国、はしのめづ

③

絵図（猿橋）

④

らかなるもの、周防の岩国橋と此はしなりけり。さる中に、岩国のは、そのたくみたへにしてのどかなり。こゝのは其さまくしひにしてすごし。いはゞから絵に似たり、かしこのは土佐がかける筆ともいふべくなん。あないするところのもの立出て、この橋かけ替てより三十年ばかりにもやなり侍らん。今はまたかけ替つべき年頃になれりといへり。いかなる人が、かばかりたくみなるものをかけそめけん、そのもとのしられぬはいとあたらしくこそおもふに、もと東西の岸より枝をさし交はせる大樹どものありけん。今もさる梢どものほど〳〵かなたこなたよりおひしげれるがみゆるに、かならずいにしへは大なる木どもの有けんことしられぬ。そのをりは、もはら猿などの梢をつたひてわたりしところなるべし。それにならひてつくれるならん。さるゆえによりて、猿橋とはいひけんかし。かの勢田より宇治にゆく川中に、しゝとびといふあり。又大堰川の川上にも猿飛といふ所ありてをり〳〵さるものどものとびわたるあり、といへる

⑤

絵図　葛野川と桂川

写真　猿橋全景

⑥

をもおもひ合すべし。或はさる橋は算はしといふこと葉の訛れるなりといへり。いづれまことなりやしらず。

さみだれの　はるゝひるまも　をくらきに　あやふくわたる　かひの猿はし　ここより少し西のきしをつたひておりゆけば、桂川と葛野川と出あいて

其水、つき出たるいはほの間を右左にまがりて
数町のほど流れくだりて、猿橋の岩のはざまに
うちそゝぐあり。けしきいといみじ。

葛野川　水のしらなみ　岩こえて　かつらに落る
おとのさやけさ　川をへだてゝむかひのかたは、青き
山ども千重にかさなりて、それより上に岩殿山
よこおもてをあらはし、ふもとはるかに賤が家ど
ものほのかに見えわたりたる。似るものなし。高嶺
のしら雲見るがうちに、けしき立かはりゆくなど
其おもふきつくしがたし。岩殿山はこゝより二十
丁ばかりにして、むかし武田の士小山田信茂の居
たる名高き城あとなれば、ゆきみんことを厳夫に

⑦

絵図（岩殿山）

⑧

そゝのかせど、けさのほど雨ふりたれ、小草の
露も深くや侍らん、ことに雲たちまよひて、又も
降出つべき空のさまと見ゆるに、たやすくはのぼる
べくもあらずと、とゞむるに、ひとりさかしたち
たらんも、かたへにくきものなればとてやみぬ。うへは
猿橋をわたらせたまひて、御くるまにめさせ給へ

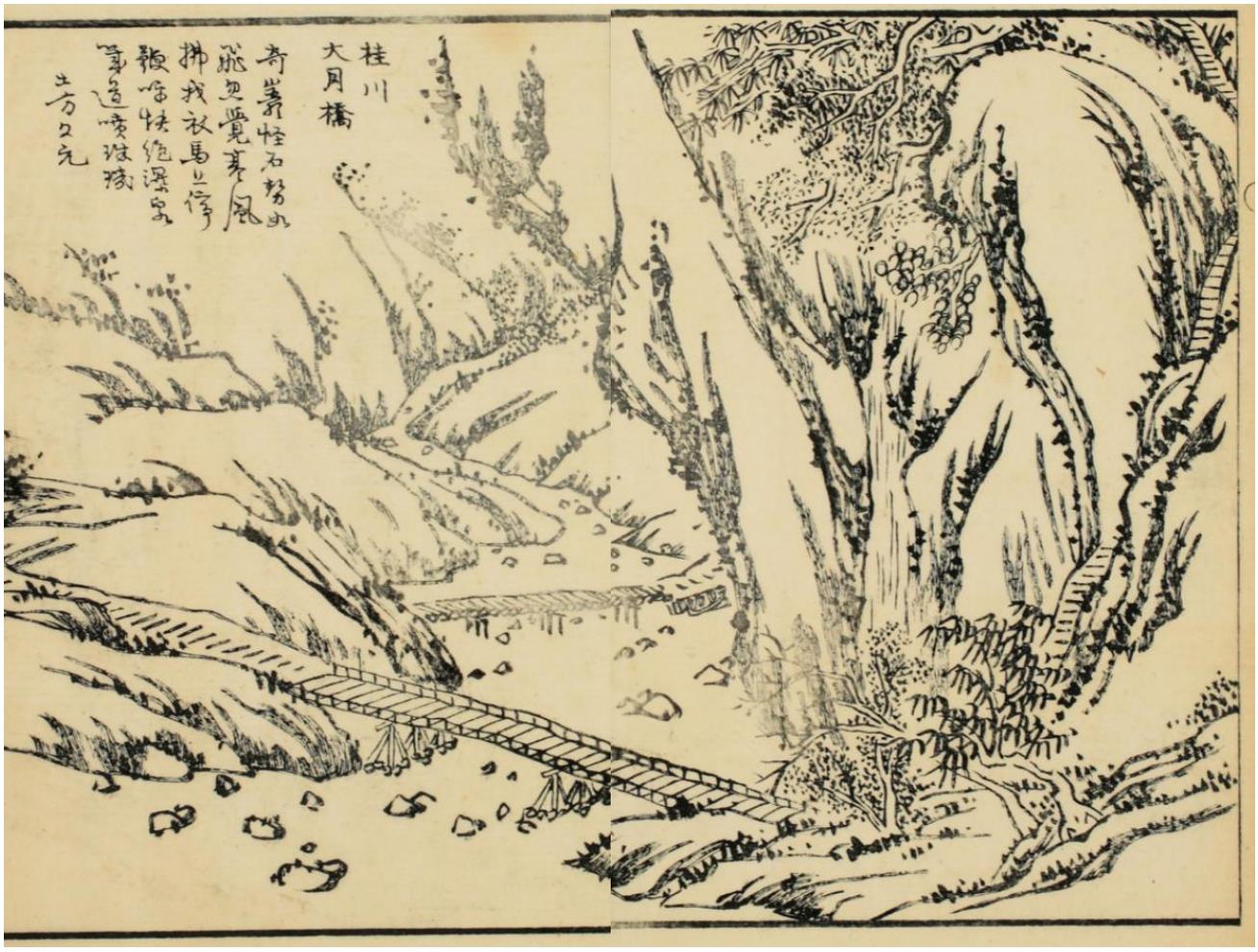
り。これより大橋駅までは路たひらかなればなりとぞ。大橋駅まで十四五丁の間、岩殿山を右にみてゆく。近くなるまゝ、つくぐく見るに、此山、大なる巌、そのいただきに聳えたるほとりに、松の一もと二もとくねりがちにてたてるがいとをかし

朝あらし　岩との山を　おろしきて　吹こそかへせたびの衣手　大原村を過て大橋駅なり、千三百間ばかりのくだり坂ありて、いと危し。車をおりてゆく。おりはてたる所に川あり。桂川の源にて大月橋といふあり。こゝもいとけしきよき所なり。ことし五月に此橋をかけたりといへり。橋をわたりてかへりみれば、岸の上より滝おつ。いと薄きたきの岸の

⑨

いたゞきより、しづくのやうにちりて、中ほどはことにうすく、岩角もよく見えすく。そのすそは、やうく厚くなりて、いはほのうへに落かゝる。さながら玉をちらすやうなり。すべて此国はすこしばかりの滝はいくつともなくありて、名さへつかぬが多く、これもそのたぐひなり。もしみやこ近くあらましかば、いかに名高き滝ならましを、いとあたらし。

大月の　はしのひかりと　なるものは　岩より
つたふ　たきのしら玉　ともいはまほしくや、わたり
はて丶広里村なり。行々て花咲に来たり。此あた
り、村々里々より人おほく出来て、れいの学校の弟
子とぞ。御迎の旗たてたるところおほかれど、くだ
くだしければ、ことそぎてしるさず。

いざ子ども　学びの道に　おこたりて　はなさき
みのる　■まつわれば　花咲学校の前に織屋をま
うけて、十二三歳よりはたちばかりのむすめども
二十人ばかり、甲斐絹を織居たり。おもふにかの
⑩
校の生徒なるべし。其わざを、うへのみそなはした
まふべくかまへたり。

絵図（大月橋）